

特集 スポーツと図書館

日本体育大学図書館の活動とこれから

◎体育スポーツを支える図書館を目指して

宮原 柔太郎

1 はじめに

日本体育大学は、創設者・日高藤吉郎が掲げた「體育富強之基（たいいくふきょうのもとい）」を建学の精神とし、これまで体育スポーツ界で活躍する競技者・指導者を育成してきた。日体大関係者がオリンピック・パラリンピックで獲得した総メダル数は133個（金メダル39個、銀メダル46個、銅メダル48個）で、オリンピック大会に限れば、日本人が獲得した総メダル数497個の約26%を占めている¹⁾。現在は、“真に豊かで持続可能な社会の実現には、心身ともに健康で、体育スポーツの普及・発展を積極的に推進する人材の育成が不可欠である”との基本理念の下、教育・研究・社会貢献に力を入れている。図書館も大学が掲げるミッション・ビジョンの実現に向けて、さまざまな取り組みを行っている。

本稿では日本体育大学図書館（以下、日体大図書館）の歴史や活動内容、特色ある蔵書について紹介する。

2 日体大図書館の概要

日体大図書館は、東京・世田谷キャンパスに所

在する世田谷本館、横浜・健志台キャンパスに所在する健志台分館、保健医療学部図書館の3館で構成されている。蔵書数は526,027冊、雑誌数は7,048タイトル（2018年度末現在）で、体育スポーツ分野に関する専門資料が充実している。スポーツ科学分野のデータベースSPORTDiscus with Full Textなどの各種データベース・電子ジャーナルも提供している。2012年には日本体育大学学術機関リポジトリを立ち上げ、学内紀要、博士論文を公開している。

中央図書館機能をもつ世田谷本館は、東京・世田谷キャンパスの再開発に伴い、教育研究棟2階・3階の一角に移転。2010年9月にリニューアルオープンした（写真1）。蔵書の中心である体育スポーツ分野の資料は開架方式で配架しているが、蔵書数が多い競技関係図書の一部や雑誌のバックナンバーは約40万冊収蔵可能な自動化書庫に収蔵している。

健志台分館は、横浜・健志台キャンパスの正門近くに位置し、主に体育学部・スポーツマネジメント学部 to 所属する学生の学習図書館機能を担っている。同キャンパスの9号館内に配置された保健医療学部図書館は、保健医療学部および保健医療学研究科の学生をサービス対象としており、整復医療分野、救急医療分野の専門書を中心に所蔵している。

日体大図書館の特徴のひとつが、開館時間の長さである。学生の約7割が運動部などの学友会に加入しているため、活動後でも図書館を利用できるように、授業がある期間の平日は世田谷本館と

みやらはら じゅうたろう：日本体育大学図書館

キーワード：日本体育大学図書館、体育スポーツ専門図書館、蔵書構築、専門分類、コレクション、日本体育図書館協議会



写真1 日本体育大学図書館
世田谷本館閲覧席

健志台分館が22時まで開館している。授業期間
は土曜日、日曜日も開館しており、年間の開館日
数は世田谷本館が334日、健志台分館が323日と
なっている（2018年度実績）。保健医療学部図書
館の開館時間は他の2館と異なるが、閉館後に館
内の一部を自習室として開放している。

また、日体大図書館では、高校生以上で所蔵資
料の利用を希望する学外者に一般公開を行って
おり、年間1,500名ほどの利用がある。多くは卒業
生や他大学の研究者だが、近隣に公共図書館が少
ない健志台分館では付近住民の利用も多い。

3 日体大図書館の歩み

日本体育大学は、1891年に創立された「体育
会」（翌年に「日本体育会」と改称）を淵源とし、
前身の日本体育会体操練習所、日本体育専門学校
を経て、1949年に新制大学として設立された。
体育系単科大学としての時代が長く続いたが、
2013年に児童スポーツ教育学部を開設、翌年
には保健医療学部を開設した。その後、体育学部
武道学科、社会体育学科を改組する形で、スポ
ーツ文化学部（2017年）、スポーツマネジメント学
部（2018年）を開設している。現在は「身体にま
つわる文化と科学の総合大学」として、5学部3研
究科を擁する総合大学になっている。

大学が130年近い歴史を誇る一方で、日体大
図書館の歴史は浅い。組織として、図書館が設置
されたのは新制大学への昇格がきっかけで、文部省
（当時）に提出された「日本体育大学設置認可申

請」に「日本体育大学附属図書館規程」が添付さ
れている。しかし、当時の蔵書数は千数百冊程度
で、“大学昇格の際に卒業生や戦時中の勤労動員
先であった日本鋼管から寄贈された図書を主体”
としていた²⁾。戦災で校舎・運動施設の大半を失
い、土浦市の仮校舎に移転していた本学には、資
料の収集に充てる財政的余裕はなかったことがう
かがえる。また、当時は学友会内に設けられた図
書部の学生が図書館運営の中心を担っており、兼
務の形で教員が管理にあたっていた。

1971年になって、ようやく司書資格を持った
専任職員が採用されるようになり、図書館の人的
体制が整えられている³⁾。翌年の1972年には本
館業務の一部として情報部が設置され、体育ス
ポーツ分野における情報提供サービスが試みられ
ている⁴⁾。この頃には、図書予算として2,000万
円が計上され、年間受入れ冊数が7,000冊を超
えるようになった。1975年の大学院設置以降は周
辺領域を含む学術雑誌や稀覯書の収集が本格化
し、蔵書の質的充実が図られている。

1980年代には、体育スポーツ分野の専門図書
として学内外から認知されるようになった。例え
ば、1981年に開始された学術雑誌総合目録和文編
データベース事業では、日体大図書館が体育学分
野の担当館として委嘱を受けている⁵⁾。また、
1981年6月に発足した体育図書館協議会（後に、
日本体育図書館協議会と改称）では、本学が代表幹
事館を務めている。1987年には東京・世田谷キャン
パスの旧10号館を増改築する形で独立館として
新規開館し、記念に『日本体育大学図書館所蔵

表1 日体大図書館購入図書冊数

| | | 2014年度 | 2015年度 | 2016年度 | 2017年度 | 2018年度 |
|----------|----|--------|--------|--------|--------|--------|
| 体育スポーツ分野 | 和書 | 4,413 | 3,276 | 4,923 | 3,480 | 3,590 |
| | 洋書 | 994 | 1,496 | 1,494 | 813 | 658 |
| その他の分野 | 和書 | 2,567 | 3,104 | 3,668 | 4,442 | 3,955 |
| | 洋書 | 174 | 71 | 25 | 44 | 85 |
| 合計 | 和書 | 6,980 | 6,380 | 8,591 | 7,922 | 7,545 |
| | 洋書 | 1,168 | 1,567 | 1,519 | 857 | 743 |

特別図書目録』(日本体育大学図書館, 1987)が刊行された。本書には洋書 631 点, 和書 152 点が稀観書として掲載されており, 多くの研究者が日体大図書館を訪れる契機になったとされる。

その後, 1989年7月に横浜・健志台キャンパスに健志台分館が開館。2014年4月には保健医療学部開設に伴い, 保健医療学部図書館が開館し, 現在の3館体制になっている。

4 収集方針

日体大図書館では, 大学が社会的使命として掲げる“体育・身体活動・スポーツを通じた健康で豊かな社会・人づくりの実現”を果たすために必要な資料を収集し, 学術情報として提供している。「日本体育大学図書館 資料収集, 保存・除籍の基本方針」では, 収集の基本方針9項目を定めており, 日体大図書館の中心主題である体育スポーツ分野の資料については“媒体に関わらず網羅的に収集する”としている⁶⁾。

体育スポーツ分野は, 人文科学, 社会科学, 自然科学にまたがる学際的な領域であるため, 収集の対象は広い。市販されている図書は学術書や入門書だけでなく, 一般の大学図書館では収集の対象になりにくいスポーツ選手のエッセーや伝記, 自費出版本も含めて購入している。関係者のみに配布されることが多い, 競技団体の年史, 国民体育大会の報告書などは寄贈依頼を行い, 可能な限り収集に努めている。

過去5年間における日体大図書館の購入図書冊数を表1に示す。体育スポーツ分野の図書は両キャンパスで提供できるように複本購入するため単純比較はできないが, 冊数で見ると, 各年度で

購入する図書の半数以上が体育スポーツ分野の図書になっている。洋書は英語を中心にドイツ語, フランス語などの学術書を購入している。これまでに日体大図書館が収集してきた資料には, 国内では本学しか所蔵していないような貴重な資料も多い。そのため, 学内利用だけでなく, 学外からの訪問利用やILLを通じた利用も多くなっている。

5 日本体育大学図書館 体育・スポーツ分類表

現在, 日体大図書館では和書・洋書ともに『日本十進分類法新訂9版』を採用しているが, 専門主題の体育スポーツ分野は「日本体育大学図書館体育・スポーツ分類表」⁷⁾を使用している(表2)。

独自の分類表を作成する計画は早い段階からあり, 1976年度の年次報告では日本十進分類法の780が体育大学の分類表としては粗大すぎるとして, 体育学専門分類表作成に向けて, 教員・学生・司書合同の分類研究会を開催したことが報告されている⁸⁾。その後, 他大学の分類表を参考に検討が続けられ, 1988年1月に「日本体育大学図書館体育関連部門分類表」が完成した。

体育関連部門分類表は, 『日本十進分類法新訂7版』をベースにしているが, 本学の蔵書構成にに応じて下記に示すような追加・修正が行われている(下線部が『日本十進分類法新訂7版』との相違点)。

①分類項目の細分化

例) 783.7 野球(ベースボール)

783.721 野球史(日本) [日本以外
→ 783.72]

表2 日本体育大学体育・スポーツ分類表(抜粋)

| 分類番号 | 分類項目 | 関連のキーワード |
|---------|---|---|
| 780 | スポーツ. 体育 Sports and physical training *ここには, 体育〈一般〉および社会体育を収める *学校体育, 保健体育→375.49; 体操・遊戯(幼児教育) →376.157; 幼児体育→780.71; スポーツ興行→780.67 | アマチュア規定. 女子体育. 職業ガイド. スポーツ事故判例. Sports law |
| 780.1 | 体育理論. 体育学 →: 498.3 (健康法) | スポーツ倫理 (Sport ethics, moral). 大学保健体育テキスト |
| 780.11 | 体育力学. バイオメカニクス (運動学). キネシオロジー | movement |
| 780.13 | 体育社会学 | スポーツジャーナリズム論 * Sports writer の評論→780.49 (雑記) |
| 780.14 | 体育心理学 | |
| 780.18 | 体育測定運動能力. 測定評価 →: 498.28 (国民体力管理) | 体力. Physical fitness. →: 469.5 (人体測定学) |
| 780.19 | 体育医学. スポーツ医学 →: 494.78 (リハビリテーション) | 健康スポーツ. 運動処方. ドーピング. スポーツ傷害 |
| 780.193 | 運動生理学 →: 491.367 (運動生理); →: 491.3 (生理学) | |
| 780.198 | 運動衛生学 | スポーツ栄養学 |
| 780.199 | 障害者体育 | |
| 780.2 | 体育史 (スポーツの歴史) * 地理区分 * 体育史話, 体育史料, 各国の体育事情 [地理区分] | |
| 780.21 | 日本の体育史 * 打毬→783.88 | |
| 780.28 | 体育家. 運動家 | 運動選手 |

783.728 伝記 自伝

②分類項目名, 関連分類項目名の追加

例) 780.69 競技大会 (オリンピック, ユニバーシアード, 国民体育大会)

アジア競技大会, 新興国スポーツ大会, 障害者オリンピック
(パラリンピック)

上記の例のように, 野球や陸上競技などの蔵書数が多い競技種目では分類項目が細分化されている。他にも 780.69 競技大会の関連分類項目名に主な競技大会が追加されている点などが, 体育スポーツ専門分類ならではの特徴になっている。

図書館内で使用する分類表を新訂9版に変更した際には, 体育関連部門分類表を改訂し, 2003年に現行の体育・スポーツ分類表に移行した。体

育・スポーツ分類表では, 新訂9版に合わせて分類項目名を修正しているが, 細分化していた分類項目は基本的に体育関連部門分類表を踏襲している。移行から15年以上が経過した現在では, 分類表に記載がないスポーツ競技の図書も増えている。そのような図書を受け入れた際には, 整理担当者間で分類調整を行っているが, 新訂10版への移行を含め, 分類表の見直しが課題になっている。

6 特色ある資料

6.1 貴重書・準貴重書

現在, 本学では貴重書313点, 準貴重書766点を所蔵している。貴重書・準貴重書に指定された

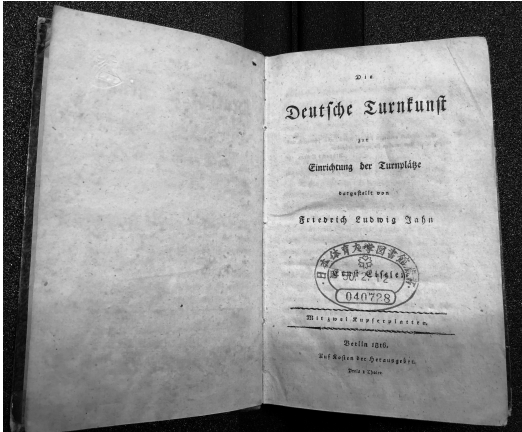


写真2 F.L. ヤーン著『ドイツ体育術』(Die Deutsche Turnkunst zur Einrichtung der Turnplätze, 1816)

図書の多くは洋書で、代表的なものに1492年刊行の『人体に関する知識』(Petrus Montis de dignoscendis hominibus)がある。本書は人間の動きを自然科学と人文科学の側面から捉えた書物で、本学が所蔵する唯一のインキュナブラである。他には、創設者の日高藤吉郎が影響を受けた、「ドイツ体操の父」F.L. ヤーンの著書『ドイツ体育術』(Die Deutsche Turnkunst zur Einrichtung der Turnplätze, 1816)が貴重書に指定されており、本学のアイデンティティを感じさせる資料になっている(写真2)。

本学の貴重書・準貴重書は、大学院体育科学研究科で初めての「博士(体育科学)」が誕生することを記念して編まれた『日本体育大学図書館所蔵稀観書目録』(日本体育大学図書館, 2000)で概要を知ることができるほか、OPACでの検索が可能である。

6.2 岸野雄三文庫

岸野雄三文庫は、筑波大学名誉教授・岸野雄三先生からご寄贈いただいたコレクションである。コレクションの中核は先生の専門であった体育史であるが、哲学、宗教学、東洋思想など多岐にわたっている。

岸野先生と本学の縁は深い。『岸野雄三文庫目録 和図書編』(日本体育大学図書館, 2003)の序文によれば、日体大図書館が本格的な整備に着手し

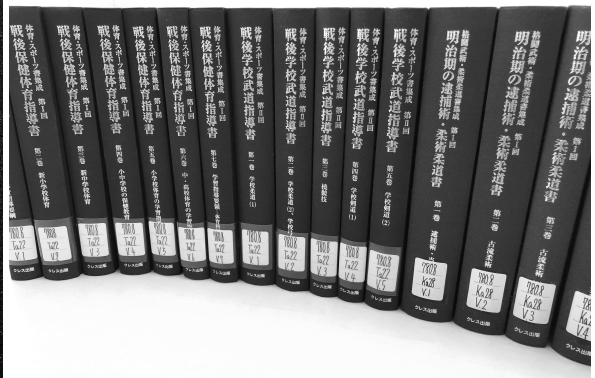


写真3 民和文庫復刻資料(民和文庫研究会編)

た1970年頃、岸野先生に蔵書構築のアドバイスをお願いしており、当時の職員が東京教育大学体育学部体育史研究室を訪ねていたという⁹⁾。

同書で第13代図書館長・瀧澤康二が述べているように、本学の貴重書の多くが西洋古版本で占められているのは、西洋の身体文化史や競技史の第一人者であった岸野先生の影響が大きい。また、本学が体育科学研究科博士後期課程の設置申請を行った際には、岸野先生に設置特別委員会の委員としてご尽力いただいている。こうした縁が重なり、2001年に日体大図書館初の個人文庫として蔵書を受け入れることになった。ご寄贈いただいたコレクションは、冊子体目録2冊にまとめられているほか、専用ページで目録を公開している¹⁰⁾。

6.3 民和文庫

民和文庫は、福島大学名誉教授・中村民雄先生によって蒐集されたコレクションである。剣道書を中心に、柔道、弓道、薙刀などの武道関連図書、伝書類が含まれている。点数は少ないが、体育スポーツ関連の稀観書も含まれており、「幻の東京オリンピック」と呼ばれる1940年大会に関わった阪谷芳郎自筆の『第12回東京オリンピック(未開催)関係資料』(1935-1938)がある。

月に一度、中村先生と本学教員を中心とする民和文庫研究会が開催されており、文庫資料を用い



写真4 プロ野球選手のサイン色紙
(南崎昌彦野球文庫所蔵)

た研究発表の場になっている。成果の一部は、解題を含む所蔵資料の復刻版¹¹⁾として刊行されている(写真3)。また、2019年に日体大図書館と国文学研究資料館の間で締結した、新日本古典籍総合データベース構築¹²⁾に関する覚書により、民和文庫所蔵の武道伝書約300点をデジタル化する計画を進めている。文庫目録として、『民和文庫蔵書目録—体育・武道篇』(民和文庫, 1997)が刊行されており、蔵書の一部を調べることができる。

6.4 南崎昌彦野球文庫

南崎昌彦野球文庫は、野球関係図書の蒐集家であった南崎昌彦氏(2011年4月逝去)によって集められたコレクションである。国内で蒐集された野球関係図書と雑誌が中心になっており、関係者でないと入手困難な高校野球の部史が多く含まれている。その他、野球選手のサイン色紙や南崎氏による取材ノートもある(写真4)。

東海大学を卒業し、三重県内で高等学校教諭として奉職された南崎氏と本学は直接の関係はないが、蔵書の散逸を心配した関係者から打診があり、寄贈文庫として受け入れることになった。南崎氏が蔵書管理のために控えていたノート2冊を翻刻した『南崎昌彦所蔵野球関係図書目録』(福島図書館研究所, 2011)が刊行されており、コレクションの概要を知ることができる。

7 オリエンテーション, 講習会

毎年4月から5月にかけて、各学部で開講されている初年次教育の機会を利用し、新入生に対して、図書館職員が図書館の基本的な利用方法を説明している。オリエンテーションでは、図書館からの一方的な説明にならないように、ミニクイズの導入、スタンプラリー形式の館内ツアーなど、毎年試行錯誤しながら改善を続けている。教員から検索課題の要望がある場合には、OPACやCiNii Articlesを用いた情報検索や文献リストの作成を演習形式で実施している。

2~4年生向けの講習会としては、レベル別に「図書館活用講座」を企画しており、論文データベースやディスカバリーサービスの使い方を紹介している。今後もカリキュラムを作成する教員と協力し、図書館に親しみをもってもらえるようなオリエンテーション、講習会を目指していきたい。

8 他機関との連携・協力

8.1 NACSIS-CAT/ILL

日体大図書館は、共同分担目録方式の総合目録データベースNACSIS-CATに1990年から参加し、積極的にデータの登録を行ってきた。体育スポーツ分野の網羅的収集を目指す本学では他機関が所蔵していない図書を受け入れることが多いた

め、必然的に書誌データを新規に作成する機会も多い。NACSIS-CAT 統計情報¹³⁾によれば、過去5年間における日体大図書館の書誌新規作成件数は表3のとおりである。2018年度までの累計件数は99,931件であり、全国21位になっている。同志社大学図書館や北海道大学附属図書館といった大規模大学図書館が上位に並ぶなかで、中規模大学図書館としては上位に位置している。

ILL サービスにおいても日体大図書館の貢献は大きい。NACSIS-ILL 統計情報¹⁴⁾によれば、2018年度の複写受付件数は2,123件（全国29位）、貸借受付件数は170件（全国127位）である。電子ジャーナルの普及に伴い、複写受付件数自体は減少傾向にあるものの、上位30位前後の実績を維持し続けている（表4）。また、NACSIS-ILL 統計情報には含まれていないが、NACSIS-CAT/ILL 非参加館からの複写申込みもFAXで受け付けており、病院図書室からの依頼が多い。

8.2 日本体育図書館協議会

日本体育図書館協議会（以下、体図協）は、“我が国の体育・スポーツ関係資料を有する機関の連絡・提携のもとに、相互協力活動を推進し、我が国の体育・スポーツの発展に寄与することを目的とする”協議会で、現在23機関が加盟している¹⁵⁾。1981年の正式発足に先立ち、1979年に「体育大学図書館懇談会」名で懇談の場が設けられた経緯から体育系学部・学科を擁する大学図書館が中心になっている。大学図書館の他にも、野球殿堂博物館や秩父宮記念スポーツ図書館などの

表3 NACSIS-CAT 書誌新規作成件数

| 年度 | 書誌新規作成件数 | 順位 |
|-------------|----------|-----|
| 2014年度 | 2,261 | 32位 |
| 2015年度 | 4,574 | 11位 |
| 2016年度 | 4,478 | 9位 |
| 2017年度 | 2,186 | 24位 |
| 2018年度 | 2,619 | 18位 |
| 2018年度までの累計 | 99,931 | 21位 |

表4 NACSIS-ILL 複写受付件数

| 年度 | 複写受付件数 | 順位 |
|--------|--------|-----|
| 2014年度 | 2,775 | 34位 |
| 2015年度 | 2,602 | 31位 |
| 2016年度 | 2,323 | 34位 |
| 2017年度 | 2,303 | 30位 |
| 2018年度 | 2,123 | 29位 |

※表3、表4とも「順位」は全国でのもの。

専門図書館が4館加盟している。日体大図書館は体図協発足以降、代表幹事館を務めており、協議会運営の中心を担っている¹⁶⁾。

過去3年間の活動状況を表5に示す。6月に開催する総会は首都圏とそれ以外の地域で、交互に開催しており、活動報告、事業計画の協議を行っている。『日本体育図書館協議会雑誌目録』を刊行していた1980年代以降、体図協として目立った活動は行っていなかったが、加盟館から研修会を求める声が寄せられたため、2011年から秋に研修会を開催するようになった。過去にはパスファインダー作成や学位論文の電子化といった

表5 日本体育図書館協議会活動状況

| 年度 | 総会 | 研修会 |
|--------|-------------|--|
| 2017年度 | 東京女子体育大学図書館 | 国立スポーツ科学センター、野球殿堂博物館見学 |
| 2018年度 | 天理大学図書館 | 日本財団パラリンピックサポートセンター 笹川スポーツ財団図書・情報調査室 国立国会図書館見学 講演「スポーツボランティアの現状と課題：2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて」 |
| 2019年度 | 日本体育大学図書館 | 早稲田スポーツミュージアム 早稲田大学中央図書館・戸山図書館 坪内博士記念演劇博物館見学 |

テーマで講演会を開催している。

ここ数年は、関連施設や加盟館の見学が中心になっているが、全国から加盟館が集まる機会を活かし、情報交換にも力を入れている。2018年からは各館の概要をまとめた「加盟館要覧」を作成しており、連携協力の基本ツールとして活用している。

先述のとおり、日体大図書館は体図協の代表幹事館を務めているため、総会では会場館との調整といった準備作業や議事進行、研修会では研修担当館と協力し、企画・運営を担当している。小規模図書館が中心の小さな協議会ではあるが、今後も顔の見える交流を続け、体育スポーツ分野の図書館における相互協力を進めていきたい。

9 課題とこれから

近年、電子ジャーナルの価格上昇が恒常化している。特に、2012年以降の円安、2015年以降の海外電子コンテンツへの消費税課税によって、年々高騰する電子ジャーナルの契約維持が各大学の財政を圧迫している¹⁷⁾。日体大図書館も例外ではなく、電子ジャーナル・データベースに係る経費の確保が大きな課題になっている。電子ジャーナルの価格上昇には購読タイトルの見直しや資料費内訳の変更で対応しているが、社会的に高い評価を受けている本学のコレクションを維持していくためには契約金額が大きいパッケージ契約の見直しを進めていく必要がある。

もう一つの課題は、専門的職員の確保・育成である。現在、日体大図書館は専任職員7名、派遣職員3名に加え、主にカウンター業務を行う業務委託スタッフで運営を行っている。専任職員は大学職員としての採用のため、他部署への異動が前提になっており、最近では学内行事や学校説明会への参加といった図書館業務以外の業務も増えている。

こうした他部署との交流は、大学業務に図書館の存在をアピールできる、教員との協働の機会が増えるといったメリットがある一方で、業務量の増加、図書館業務に精通した職員が他部署に流出するといったデメリットも生じている。多くの大

学図書館同様に、日体大図書館も職員数は減少傾向にあるが、図書館に課せられた使命を果たしていくためには、今後も図書館が所蔵するコレクションを活用できる専門的職員を確保、育成し続けていくことが課題になっている。

ラグビーワールドカップ2019を皮切りに、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会、ワールドマスターズゲームズ2021関西と国際スポーツイベントが開催される「ゴールデン・スポーツイヤーズ」を迎え、今まで以上にスポーツの持つ力に注目が集まっている。今後も体育スポーツの専門資料を収集・保存し、本学の図書館を活用した教育研究を支援していくことで、体育スポーツの普及・発展を積極的に推進する人材の育成、研究成果の社会還元貢献していきたい。

<注>

- 1) 日本体育大学—Guide Book 2020. 日本体育大学, 2019, p.87.
- 2) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編. 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史. 日本体育会, 1973, p.926.
- 3) 学校法人日本体育会百年史編纂委員会編. 学校法人日本体育会百年史. 日本体育会, 1991, p.507.
- 4) 情報部の成果は「日本体育大学情報センター」名で目録シリーズとして刊行されている。例えば、『学校体育索引目録』(1973)では雑誌『学校体育』の記事を157のテーマ別に分類、『全国大学紀要類体育学論文索引目録』(1974)では各大学の紀要から体育学に関する論文をテーマおよび著者名で分類索引している。
- 5) 永田治樹. 学術雑誌総合目録と文編データベースの編集. 大学図書館研究. vol.27, 1985, p.15-34.
- 6) 日本体育大学図書館. “日本体育大学図書館 資料収集, 保存・除籍の基本方針”. 日本体育大学図書館. <https://library.nittai.ac.jp/info/info09.html>, (参照 2020-03-10).
- 7) 日本体育大学図書館. “体育・スポーツ分類表”. 日本体育大学図書館. https://library.nittai.ac.jp/info/info06_02.html, (参照 2020-03-10).
- 8) 日本体育大学図書館編. 年次報告昭和51年度. 日本体育大学図書館, 1977, p.18.
- 9) 日本体育大学図書館編. 岸野雄三文庫目録 和図書館. 日本体育大学図書館, 2003, 213p.
- 10) 日本体育大学図書館. “日本体育大学図書館 岸野雄三文庫目録”. 日本体育大学図書館. <http://library2.nittai.ac.jp/kishino/>, (参照 2020-03-10).
- 11) 現在までに民和文庫研究会編『体育・スポーツ書集成』(クレス出版, 2017), 同『格闘武術・柔術柔道書集成』(クレス出版, 2019) が刊行されている。

- 12) 国文学研究資料館. “歴史的典籍 NW 事業”. 国文学研究資料館. <https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/>, (参照 2020-03-10).
- 13) 国立情報学研究所. “NACSIS-CAT 統計情報”. 目録所在情報サービス. <https://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/stats/cat/>, (参照 2020-03-10).
- 14) 国立情報学研究所. “NACSIS-ILL 統計情報”. 目録所在情報サービス. <https://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/stats/ill/>, (参照 2020-03-06).
- 15) 日本体育図書館協議会. “日本体育図書館協議会会則”. 日本体育図書館協議会. <http://library2.nittai.ac.jp/jlape/>, (参照 2020-03-10).
- 16) 体図協の歴史的経緯や日体大図書館が果たしてきた社会的役割については次の文献を参照されたい。
谷口豊. スポーツ科学分野の大学図書館運営と社会的役割: 日本体育図書館協議会の組織運営に触れつつ. 専門図書館. 2016, no.276, p.2-9.
- 17) 国立大学図書館協会. “大学における学術雑誌購読の危機的状況が深刻化”. 国立大学図書館協会. https://www.janul.jp/j/operations/requests/janul_press_release_2018_01_18.pdf, (参照 2020-03-10).

(2020.3.24 受理)